

氏名	CHAUHAN Anubhuti
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博甲第 8325 号
学位授与年月日	平成 29 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ヒンディー語を母語とする日本語学習者における格助詞「を」の習得

主査	筑波大学	教授	博士（言語学）	沼田善子
副査	筑波大学	教授	博士（言語学）	杉本武
副査	筑波大学	准教授		橋本修
副査	筑波大学	教授	博士（言語学）	小野正樹
副査	国立国語研究所	教授	博士（学術）	Prashant Pardeshi

論文の要旨

本論文は、ヒンディー語を母語とするインド人日本語学習者(H J L)を対象に、格助詞「を」の誤用の様相を学習期間との関係から明らかにし、その原因を、他動性という言語普遍的観点と母語転移という 2 つの観点から考察、記述しようとするものである。本論文は以下の全 7 章からなる。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 他動性と誤用の予測
- 第 3 章 ヒンディー語の格標識と誤用の予測
- 第 4 章 H J L における格助詞「を」の実態調査
- 第 5 章 述語選択に関わる誤用－自他動詞を中心に－
- 第 6 章 H J L における格助詞「を」の選択傾向
- 第 7 章 本論文のまとめと今後の課題

第 1 章では、研究の背景としてインドにおける日本語教育の現状、インド人学習者の誤用傾向を概観した上で、問題の所在、先行研究の議論、課題が整理され、本論文の目的が述べられる。

第 2 章では他動性の観点から誤用の予測をする。先行研究を概観し、プロトタイプ理論に基づいて他動性を捉える立場に立ち、特に角田(1991)の議論を軸に、角田による二項述語階層の課題を指摘し「動作主関係」と「非動作主関係」による二次元階層を主張する Malchukov(2005)、他動性の原型的意味に意志性の関与を認めない角田に反論するパルデシ (2007)、Næss(2007)を取り上げる。その上で、誤用は他動性の強さに反比例するとして、他動性を捉える角田(1991)と Malchukov(2005)の二つの階層構造に沿って、それぞれの H J L の誤用を予測し、加えて、意志性が H J L の誤用を説明する上で重要となることを示唆する。

第3章では、ヒンディー語について概観した後、母語転移によるH J Lの誤用の可能性について述べる。ヒンディー語の構造的特徴、語順、格・格標識とその機能の概要、二項および三項述語の格枠組みの種類、典型的な他動詞の格枠組みが「N₁+ne/0 N₂+ko/0 V」であることを示した後、ヒンディー語と日本語の格枠組みを比較し、ヒンディー語について次の2点が母語転移によるH J Lの誤用を引き起こす原因となり得ることを予測する。①日本語より、全体に格枠組みが多様で、他動性の高い述語カテゴリーでも、目的語が必ずしも「ko」あるいは「0」でなく他の接語で標示される。他方「ko」の意味、機能も多様で、対格、与格を表す以外に、「場所」や「目的」等を表す付加詞に加え、「命令」「依頼」の節標識ともなる。②典型的他動詞構文で示される範囲が意志性のある動詞述語に限られ、日本語より狭い。

第4章は前二章での予測の誤用調査による検証である。先行研究を踏まえ本論文での他動性の述語階層を設定すると同時に、母語転移に関する観点を示す。これに基づいて、H J Lによる作文等の書記資料における格助詞「を」の正用と誤用の調査結果を、学習期間で上位、中位、下位の3群に分けて分析し、各グループ内の様相、それらのグループ間での異同を明らかにする。その上で、他動性の述語階層に基づく考察で、H J Lの誤用率は他動性の強さとほぼ反比例する傾向が見られることを確認する。また、母語転移に関する考察で、他動性の強弱よりも意志性の有無を優先する誤用傾向が見られることを指摘する。加えて、個々の語におけるヒンディー語と日本語の格標識の非対称性による誤用があり、特に他動性、意志性の低い語ではこの傾向が強いことを確認する。これらの考察を踏まえ、H J Lの誤用の原因に関し、他動性と意志性がH J Lの大まかな使用傾向を決定するマクロ的要因であり、格標識の非対称性等による母語転移はミクロ的要因であると述べる。

第5章では、前章と同じ資料に基づき、学習の進展に伴うH J Lの有対自・他動詞の使用および誤用の傾向の変化を調査、分析し、先行研究と異なる見解を提示する。調査の結果から、先行研究と同様、H J Lの誤用調査でも、他動詞に比べ、自動詞に誤用が多くみられ、自動詞の習得がより困難である点を確認する。この原因を、先行研究では、学習者の母語が日本語と異なり、自他同形が多く、かつ、他動詞表現を用いやすい言語であることによる母語転移とする。これに対し、本論文では、日本語に近い特徴を持つヒンディー語を母語とするH J Lが同様に自動詞に偏る誤用傾向を見せることに加え、日本語母語話者の幼児の第一言語習得や英語学習においても自動詞の誤用が多いとする先行研究の指摘等から、これを普遍的現象として捉え、再分析する必要性を指摘する。また、習得段階に関わる考察においても、先行研究が有対自・他動詞を区別せずに、両者を統一して学習段階別の誤用の変化を分析し、その推移を捉えるのに対し、本論文では、自動詞と他動詞で習得過程が異なり、両者を分けて考察する必要性を主張する。

第6章は第4章を補完するもので、H J Lの、Simple Performance-Oriented Test (S P O T) による日本語の総合力の測定と、穴埋め式テストによる格助詞選択に関する知識の測定の結果に基づく、述語の他動性と格助詞選択との関係および日本語習得過程における格助詞選択の変化に関する統計的な考察である。S P O Tと穴埋め式テストの測定値の強い正の相関から、格助詞選択知識の深まりが日本語総合力の向上と連動することを確認した上で、日本語能力により上、中、下位に分けた各グループの格助詞「を」と「に」の誤選択の様相を、第4章で設定した述語階層に沿って考察する。その結果、3グループとも、他動性の強い原型やそれに近いカテゴリーの動詞と他動性の弱いカテゴリーの動詞の間に認められる、格助詞の正答率の有意差により、他動性の強弱が格助詞の習得を左右することを明らかにする。また3グループを比較し、日本語習得全体の過程から見た場合、他動性の強い「動作・作用」と「知識」は、早くに習得したと見られたものが一時期後退し、その後再び伸びていく傾向があること、他動性の弱い「関係」「感情」は習得が停滞すること、その他のカテゴリーの動詞は、日本語の総合的な能力の向上に伴い、徐々に習得が進んでいくこと等を明らかにする。

第7章で本論文の考察をまとめ、残された課題と研究の展望について述べる。

審査の要旨

1 批評

インドにおける近年の日本語学習者の急増に対して、日本語教育の研究は極めて少なく、良質な研究の蓄積が喫緊の課題となっている。その中で、本論文は、インドにおいて、話者数が最大であるヒンディー語を母語とする日本語学習者（H J L）の習得研究であり、初めての本格的な研究と言えるだろう。また、ヒンディー語あるいはインドの日本語教育を離れて、日本語学習者の格助詞「を」の習得、自動詞、他動詞の習得に関わる研究としても、高い水準にある。本論文は、調査対象を基本的にインドで学習するH J Lに限定し、学習者の学習環境、母語を統一することで、学習者の条件を統制した考察を可能にし、従来より分析の精度を上げることに成功している。また、学習者の書記資料とS P O T、穴埋めテストによる測定結果の双方を分析データとすることで、実際の日本語運用の面と、知識の定着度の両面から調査し、習得状況が十全におさえられている。ここで用いられるデータは、著者の出身大学の全面的な協力を得て収集された、質、量ともに良質なもので、考察の信頼性を根本的に支えている。加えて、述語の他動性の階層を分析に取り入れた精緻な考察は、学習者の誤用が体系的に捉えられており、展開される議論には説得力がある。同時に、他の言語を母語とする学習者の習得研究にも応用すべき、重要な視点、分析方法を明確かつ具体的に提供することにもなっている。さらに、対照言語学、言語類型論の上からも、本論文の貢献は多大である。本論文ではヒンディー語における述語の他動性をめぐり、述語階層における各カテゴリーの述語の格枠組みが提示され、これと日本語との異同が考察されるが、ここでの議論は、両言語間の対照研究の上でも有益である。特に、ヒンディー語では意志性の有無が、動詞が典型的他動詞構文をとるのに重要な要素となる点は、先行研究にも指摘はあるものの、本論文の誤用分析でその様相が具に示され、興味深い。その他にも、本論文で取り上げられる学習者の個々の誤用には、対照研究上、重要な現象が少なくない。

他方、述語階層を成す各カテゴリーに所属する個々の動詞の妥当性について、その意味、特徴のさらに深い分析が望まれるものがある。また、漢語サ変動詞の他動詞、自動詞の習得に関する考察もさらに深められることが望まれる。これには、ヒンディー語および日本語に関する、さらに十全な言語学的考察が必要となる。加えて、H J Lの学習に関して、教材等、指導内容の詳細にも踏み込む調査が行われれば、本論文の習得に関する論考はさらに十全なものとなるだろう。

しかしながら、こうした課題は本論文での研究を今後、深化発展させる方向を示すものでもあり、これらの課題が明らかになったことが本論文の成果ともいえる。本論文は、格助詞「を」をめぐる日本語学習者の習得研究に新たな視座を与え、進展の可能性を開く極めて重要な研究であると同時に、インドにおける日本語教育研究を大きく進展させ得る、画期的な研究として高く評価されるもので、その点はいささかも揺るがない。

2 最終試験

平成29年5月12日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。